遺跡からのメッセージ（60）

清水風遺跡で発見された「鹿と武人の絵画土器」

天理大学文学部教授
桑原　久男　*Hisao Kuwabara*

平成８年（1996 年）、「鹿と武人の絵画土器」が出土した清水風遺跡の第２次発掘調査を担当したのは、私の畏友の故豆谷和之さんだった。清水風遺跡は、昭和 61 年（1986 年）の第１次発掘調査で多数の絵画土器が出土したところなので、２回目となる発掘調査でも、同じように絵画土器が出土することが期待されていた。発掘調査が始まると、その予想どおりに絵画土器の破片が見つかったのだが、期待以上だったのは、パズルのように絵画土器の破片が次々につながり、「絵画」の全体の構成がついに明らかになったことだ。当時、まだ破片の状態の資料を豆谷さんに見せてもらい、資料で示された展開図を眺めたりしているうちに、私の脳裏に自然と一つの解釈が浮かんできた。その解釈は、「戦士と鹿―清水風遺跡の弥生絵画を読む―」と題した文章にまとめ、金関恕先生の古稀を祝う論文集『宗教と考古学』（平成９年、勉誠社）に収録させてもらった。

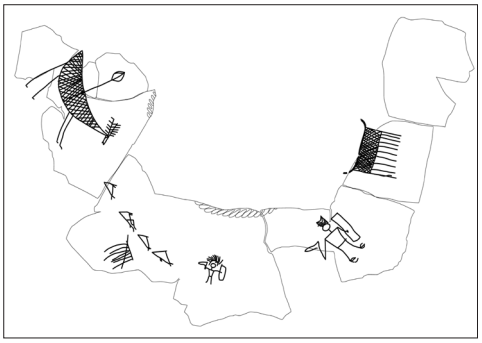

図　清水風遺跡出土の「鹿と武人の絵画土器」

建物、盾と戈（か）をもつ人物、魚、鹿などの図像が並んだこの絵画土器は、いったい何を物語っているのだろうか。展開図の左側から見てみよう。一番左側の図像は、紛れもないオスジカで、立派な二本の角が表現されている。シカの背中に矢が立つことは、発掘調査終了後になって、矢羽根を表した土器片が新たに接合して明らかになった。その右側には、４匹の魚が表され、魚の向こう側には大小二人の人物像が少し間隔を置いて描かれている。人物像の顔面には目鼻の表現がなく、正面を表しているのかどうか定かではないが、正面像だとすると、二人とも、右手に戈を持ち、左手は盾を持つ姿を表している。「干戈を交える」という表現があるが、干は盾を指し、戈は古代中国で発達した武器の一つで、柄に対して直角方向に刃部が装着される。天理大学附属天理参考館の展示室には、殷代（前 13 ～ 11 世紀）と戦国時代（前５～３世紀）に用いられた青銅製の戈の実物が展示されているが、とくに戦国時代の戈は、いかにも切れ味鋭く、実戦用の武器にふさわしい形状をしている。展示室では戦国時代の戈の柄も実物を見ることができ、同時代の青銅器の図像に描かれているように、全長 170cm ほどの長い柄を両手で振り回すようにして用いたことがわかる。弥生時代の銅戈も新旧のタイプが展示されていて、中国の戈と比較すると、装着部分が貧弱化し、非実用的な形態に変化してゆくことが確認できる。各地の弥生時代遺跡からは、戈の柄の実物も出土しているが、それらは押し並べて長さが約 60cm と短いもので、清水風遺跡の絵画土器が表すとおり、片手で握ったと考えられる。清水風遺跡の武装した二人の人物は、互いに干戈を交えているのだろうか。

オスジカと武装した人物二人の間に、魚が描かれていることについても、天理参考館の資料が参考になる。山東省の孫家村（そんかそん）から出土したと伝えられる後漢代（１～３世紀）の画像石（がぞうせき）には、始皇帝が泗水に沈んだ周鼎（しゅうてい）を引き上げようとしている場面が描かれている。よく見ると、水そのものは表現されておらず、水の代わりに、水中の生き物として魚を描くことで水を表している。同じ様に、清水風の絵画土器も、魚は水の象徴として描かれたと考えられるのではないか。さらに言えば、魚の生息地ともなる水田を表しているのではないだろうか。水田は、稲作農耕の開始に伴って新しく成立した水辺環境だが、さまざまな生き物が生息するビオトープとしての役割も持っていた。大阪府の遺跡では、水田遺構から鉄製のヤスが出土したこともあり、水田での漁労活動が行われたことも推察される。

このように考えると、魚の下に描かれた「不明」表現が問題になる。魚の下にあることから、魚を捕まえる梁（やな）と見る見解もあるが、そうだろうか。『豊後国風土記』には、田の苗をいつも鹿が食べてしまっていたので、柵を造って待っていると、鹿が現れて柵の間に頸を入れて苗を食べようとしたという有名な説話があり、古代においても現代と同じく、獣害を避けるため、水田脇に柵を設置していたことが理解される。この説話を念頭に置いて、もう一度、清水風の絵画土器を眺めると、魚＝水田の下に描かれている不明図像は柵を描いたものと見ることができ、全体としては、水田の脇に設けられた柵をはさんで、稲を食べようと水田に現れた鹿が、それを防ごうとする武装人物と対峙している構図になる。二人の人物は、互いに干戈を交えているのではなく、水田を荒らしに来たオスジカと対決しているのだ。この解釈がもし当を得ているとするならば、柵の右側は、人物と建物が示すように人間＝文化の世界であり、柵の左側は、オスジカが象徴する自然の世界になっている。まさに、弥生人の世界観（コスモロジー）が浮かび上がってくるようだ。

一番右側の高床建物は、柱が 10 本表現されていて、この絵画土器が発見された当時は、空想上の表現かとも思われた。しかし、清水風遺跡に隣接する唐古・鍵遺跡では、本誌６月号の記事で紹介したように、豆谷さんが、二度にわたって大形建物を発見し、絵画土器の建物表現は実在の建物をモデルにしたと見なせるようになった。水田脇の柵列については、将来、唐古・鍵遺跡で水田が見つかったら、その脇で柵の柱穴が見つかるかもしれないなどと、豆谷さんと談笑していたものだが、残念ながら唐古・鍵遺跡では水田跡そのものが未だに発見されていない。

天理参考館には、唐古・鍵遺跡で採集された鹿の絵画土器片が展示されているが、これも、本来は他の図像と組み合って場面を構成し、何らかのメッセージを発信していたはずだ。６月 28 日に実施した歴史文化学科のオンライン模擬授業「弥生土器に描かれた鹿」では、このように、天理参考館の展示資料が歴史文化を探る手がかりになることを、高校生たちに説明させてもらった。来春になり、多くの新入生たちとキャンパスで会えることを願っている。